

[書評]

Anne Spier : Mit Witzen Deutsch lernen. Eine Sammlung von 520 Witzen für den Sprachunterricht Deutsch als Fremdsprache / Zweitsprache. Berlin : Cornelsen Verlag, 2005

押 野 洋

本書はVolkshochschule (市民大学) で長年、外国人に対し、外国語としてのドイツ語を教えているドイツ語講師Anne Spierの手になるものである。現在ドイツでは総人口の約9%が外国人であり、首都ベルリンを例に取れば、その割合は15%弱にもなる。比較的安く受講できることもあって、現在、多くの外国人が市民大学でドイツ語を学んでいる。多国籍で年齢層にも幅がある受講生を相手にする授業担当者は、日本の大学で主に日本の学生を対象とした場合と比べた場合、当然ながらより多くの事柄を考慮せざるを得ない。同質性の極端に低い多国籍性という観点からは、教師は、どの文化圏の出身者にも受け入れられて、尚且つ、楽しい授業になるような補助教材を考えるであろう。この著者には『Mit Spielen Deutsch lernen (遊びながら学ぶドイツ語)』(1981)という著作もあるが、その実践例がこのロングセラーを続けている本であり、そしてここで俚上に載せているのが、ジョークを使ったその実践の一つということになる。

この書の中核を成すのは17~145ページに取り上げられている520のジョークである。ジョークは初級の学習者向けの第一部(17~126ページ)と中級者のための第二部(127~145ページ)とに分かれている。更に第一部はテーマによって以下の19章に分かれている。「仕事の世界」「医者」「車と交通」「買い物」「金」「家

族」「男と女」「子供」「学校」「喫煙」「旅と旅行」「レストランでの注文」「レストランでの苦情」「スポーツ」「動物と人間」「擬人化された動物」「犯罪と司法」「雑」「謎々」。第一部の特徴は、ドイツ語で記されたジョークの下に注としてその中で扱われている文法事項が明記されている点である。例えばジョーク1では、「weilを用いた副文」と「話法の助動詞sollen」の二つの文法事項が書かれている。これによって学習すべき文法事項から、逆に、それに合うジョークを比較的楽に探し出す事も可能となっている。

ジョーク第二部の75のジョークは、中級者向けで、内容も語彙も難しくなっており、文法事項の注も省かれている。「ディスカッションの方向づけと語彙の拡充」(15ページ)を狙いとする中級ジョークは、二つに大別できる。まず、語彙の学習に役立つ、言葉の多義性を利用した言葉遊びの「取り違えジョーク」。もう一つは、ステレオタイプ化された物の見方に依拠した定番ジョークであり、国民性と職業が扱われている。国民性ジョークは例えば、ヨーロッパ版、天国と地獄(137ページ)。「ヨーロッパでの天国は、イギリス人が政治家、ドイツ人が機械工、フランス人がシェフ、イタリア人が愛人、そして全てを統括するのがスイス人。一方、地獄は、政治家がドイツ人、機械工がフランス人、シェフがイギリス人、愛人がスイス人で、全て

を統括するのがイタリア人」。多国籍の受講者には、格好の議論のテーマとなるであろうが、この類のジョークは、エスニック・ジョークにも重なり合うので、扱いには特段の配慮が必要とも記されている。ある種の職業にも特殊なイメージが固着している。医者金亡者、政治家おつむが弱く、公務員は怠け者、職人は信頼できない—こういった定番ジョークは各国で例を持ち出して比較検討できるし、議論の端緒にもなりうるものである（143ページ）。

章によっては冒頭に略説が書かれていることもある。「学校」の章の説明では「日本」にも言及されている。「学校ジョークでは大抵、教師の権威が生徒によって攻撃される。例えば日本のような、教師が依然として無条件に尊敬すべき人物とみなされている文化圏からの受講生には、スクール・ジョークの中には受けないものもあるであろう」（65ページ、下線筆者）。日本の教師像に関しては作者の事実誤認があるのかもしれない。

既述のように受講者の多様な文化の背景性がこの著作の特徴を形成していると言える。それはジョーク (Witze) の選択についても言える。

「誰も蔑視したり侮辱したりしない」（15、16ページ）というどの文化圏出身者にも配慮したジョークが選り抜かれている。タブーに触れた「ブラック・ジョーク」、特定の人種・民族をターゲットにした「エスニック・ジョーク」、「宗教・ジョーク」、「政治・ジョーク」、更には専門的知識を前提とする「専門・ジョーク」はない。ドイツ関連では、「第三帝国・ジョーク」、「旧東ドイツ・ジョーク」、「オッシー・ヴェシー・ジョーク」も除外され、方言を含む「地域ジョーク」も取り上げられていない。結局、国内外の文化の多様性に配慮したため、万人向けの当たり障りのない、ある意味毒を薄められたジョークが集められているとも言える。呵呵大笑するようなものも、相手を瞬時にやり込める起爆性を持つ攻撃的ジョークもない。こ

の鋭利性の削除は文体にも見て取る事ができる。ジョークの文体の特徴の一つとして、平叙文での定形第一位が挙げられる。定形が先頭に来る事で、聞き手や読み手はジョークの世界に瞬時に誘われるのである。初心者には理解しにくい文法事項であり、この本では一度も使われていない。実際、著者は「ジョークに特有の定形第一位は全て書き改めた」（147ページ）と書き記している。これによってジョークの鋭角性は減じるが、文法面での理解度がアップするのは間違いない。この本が出版される一年前にドイツ語に直せば『Mit Witzen Deutsch lernen』（『ジョークで学ぶドイツ語』）となる本を纏めた筆者にとって最大の関心事はこの点であった。ジョークは長い年月を経て文体上結晶化している。ジョークに顔を出す特殊な文法事項、特に先述の平叙文での定形第一位と現在時制の多用の2点がどのように扱われているのか？ 後者について補足しておけば、既に完了した話を後追いで語るのがジョークの常道であるならば、時制は過去か現在完了か過去完了が普通であろうと思われるが、実際は、現在形が好んで使われるのである。現在時制を使う事で、その事柄が今、現在進行中であるような臨場感を醸成することが可能となるからである。ジョークでは、これとの関連で、通常は過去や現在完了形で用いられる従属接続詞alsが現在時制で使われる事が多い。この書でも、この例は2回見出せるが、多用を避けたのは文法事項の混乱を避けてのことであろう。

ジョークは授業では、語りでも文章でも提示する事ができるが、このジョークを用いた授業の展開例も6点紹介されている（150ページ）。

①新しいテーマ、文法事項、語彙を学ぶ。②学んだテーマなり文法事項を授業の最後に確認する。③対話ジョークの話法の転換や句読点を補うことで正書法の練習。④記憶力のトレーニングとして、キーワードからジョークを再構成する。⑤ダイレクト・メソッドの授業では、ジョークで翻訳不可能な箇所が啓発的な議論の契機

となる。⑥ディクテーションの訓練。教師の口述、あるいは受講生同士のディクテーション。更に151～152ページではより具体的な例が提唱されている。各学習者が別々のジョークを予め暗記しておき、それをクラスで披露。その際、幾つかのグループに分け、そのジョークに対し自由に意見を述べあうことも、そのジョークを採点しあうことも可能。あるいは、用紙に書いておいた複数のジョークを対話や語りごとに切った後、ばらして混在させ、その中からジョークを再構成する。この場合、混在する中から落ちの部分だけを見つけ出すことも有効。または、ジョーク中の形容詞の語尾変化、前置詞、動詞、句読点等を欠落させておけば、文法確認も可能になる。さらに中級者向けとしては、ジョークを長めの文章や詩に書き改めることで文章表現力の養成にもなるのである。多国籍性に関して言えば、ドイツのジョークと同じようなものが出身国にあるかどうかという観点からも有意義な議論が導き出せるであろう。

巻末には、ジョーク、ユーモアに関心のある向きには有益な、所々解説の加わった文献リストがつけられている。

最後に気になった点を述べておく。13, 14ページでジョークのテーマ・内容に関して触れた

箇所、ドイツで1950, 60年代に好まれていた「義母ジョーク」(夫にとって義母は忌み嫌うべき存在というのがこのジョークの眼目)は、戦後の住宅事情の関係で二世帯同居が普通であったからで、その後の住宅状況の改善により核家族化が進行し、もはや同居は一般的ではなくなったため、この手のジョークは現在ドイツでは死滅している、という記述があるが、今年(2007年)ドイツで出版された最も新しいジョーク集の一つである『Der große Witzekracher』には「義母ジョーク」も載っている。ジョークの世界を現実世界に結び付けて云々するのはどうであらうか? ジョークの世界も国際化が進んでおり、現在、フィクションのジョーク世界では内容に関して何でもありの様相を呈している。ジョークを狭い現実世界に引き戻して論じるのは、そもそもジョークやユーモアを享受する姿勢とは相容れないのではないだろうか。もっともこの本の狙いはジョークを用いた授業の展開なので、この点は瑣末なことにすぎない。

一般に単調で退屈と思われているドイツ語の授業も、まだまだ工夫次第で知的な笑いに満ちた授業に変容させることは可能なのである。本書は、そのヒントが一杯詰まった好著と言えるだろう。